

口永良部島

1 火山活動度レベル

火山活動度レベルは2(やや活発な火山活動)でした。

2 概況

火山性地震はやや多い状態が続いており、火山活動はやや活発です。

3 噴煙活動の状況

監視カメラによる観測では新岳・古岳からの噴煙は観測されませんでした。

4 地震・微動活動の状況(図2、図3)

- ・火山性地震の月回数は169回(4月:289回)とやや多い状態が続いています。
- ・火山性微動の月回数は2回(4月:11回)と少ない状態で経過しました。
- ・地震の震源は、新岳付近のごく浅いところに求まりました。

5 熱観測(図4~7)

全磁力の繰り返し観測では、2005年9月までは新岳火口北側の観測点で全磁力が増加、南側の観測点で全磁力が減少し、新岳火口周辺の温度上昇に伴う変化が認められたが、2006年2月以降その傾向は見られなくなりました。

5月に実施した調査観測では昨年9月と比べると高温域の広がり等の変化は認められませんでした。

6 地殻変動(図8)

GPS及び光波測距の繰り返し観測では、2005年9月まで新岳火口を中心に膨張傾向が見られましたが、2006年2月以降は見られなくなりました。

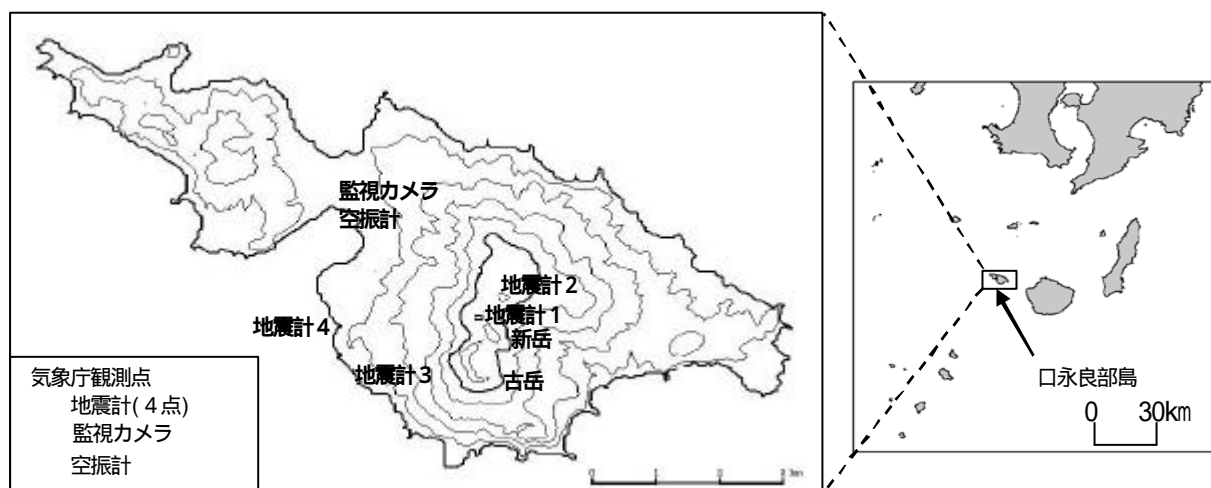


図1 観測点位置図

資料作成に当たっては、気象庁のデータその他、京都大学、鹿児島大学、独立行政法人防災科学技術研究所のデータを使用しています。また、地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用しています(承認番号:平17総使、第503号)。

口永良部島

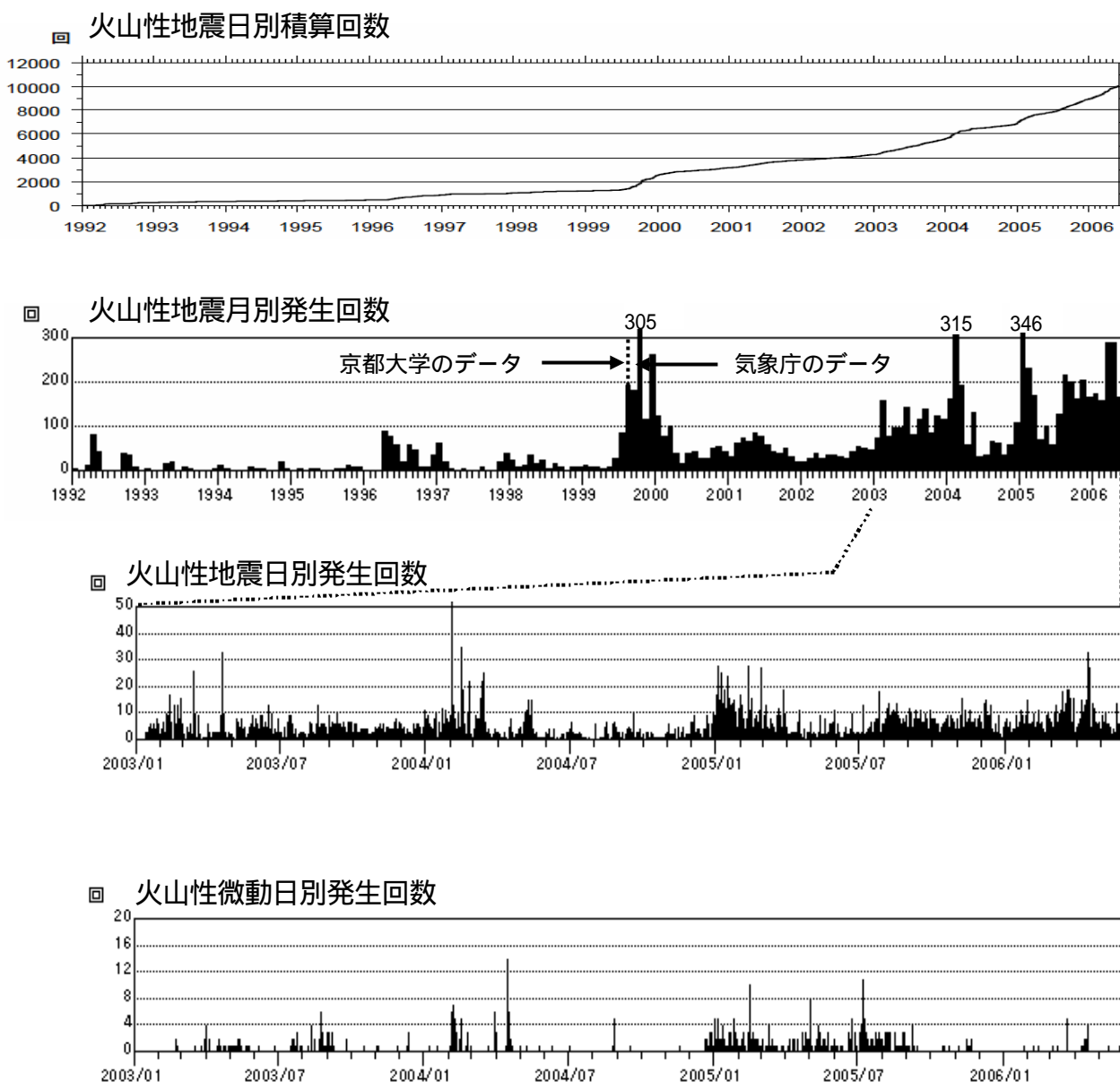


図 2 火山活動経過図(1992 年 1 月 1 日～2006 年 5 月 31 日)

火山性地震は 2005 年 7 月以降やや多い状態が続いています。

火山性微動は、2004 年 12 月以降やや多くなりましたが 2005 年 9 月から少ない状態で経過しています。

- 1992 年 1 月 1 日～1999 年 9 月 12 日、2005 年 12 月 15～28 日は京都大学が口永良部島に設置した観測点で計数したデータを使用しています。

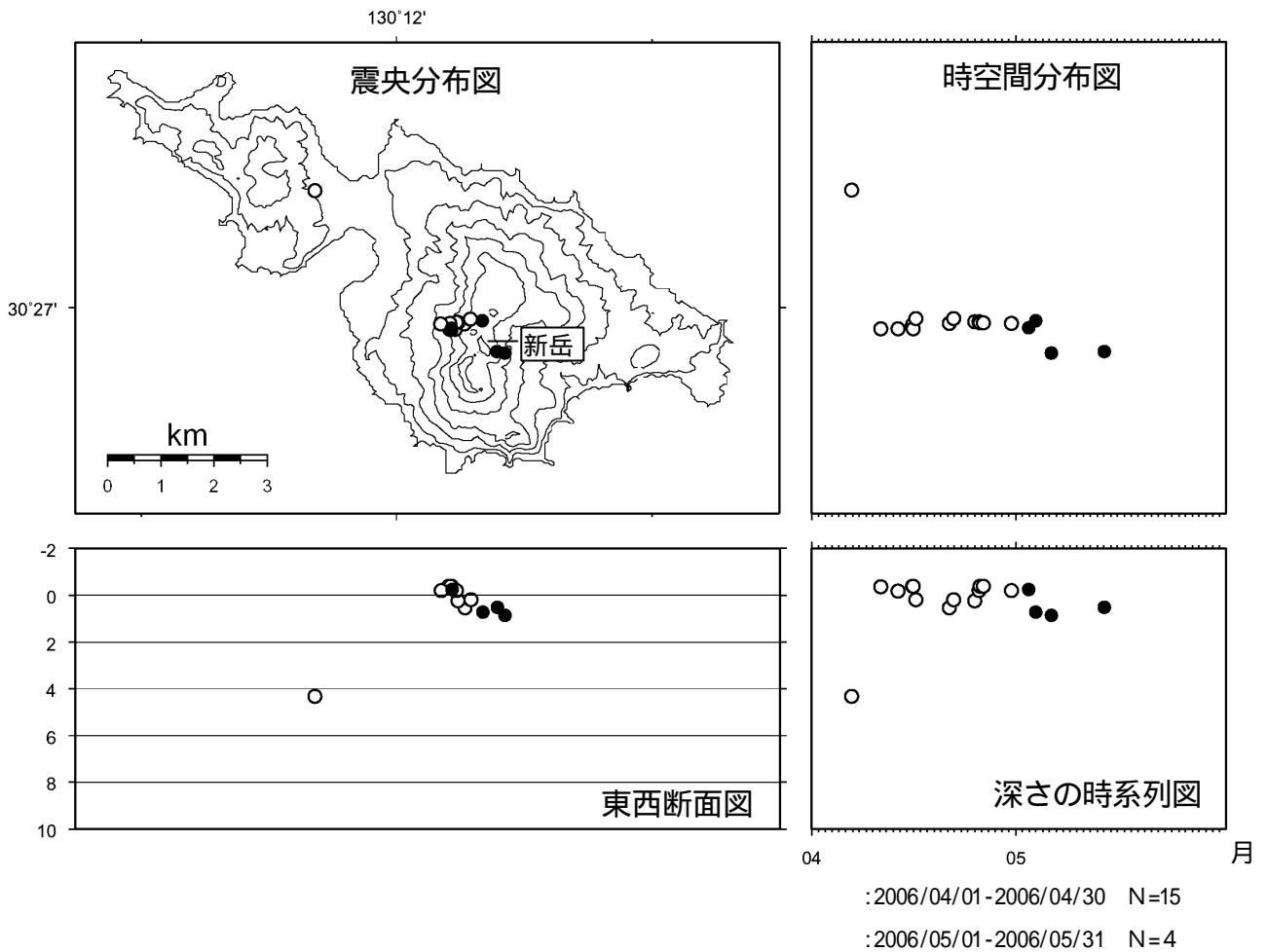


図3 火山性地震の震源分布(2006年4月1日～5月31日)
地震の震源は、新岳付近のごく浅いところに求まりました。

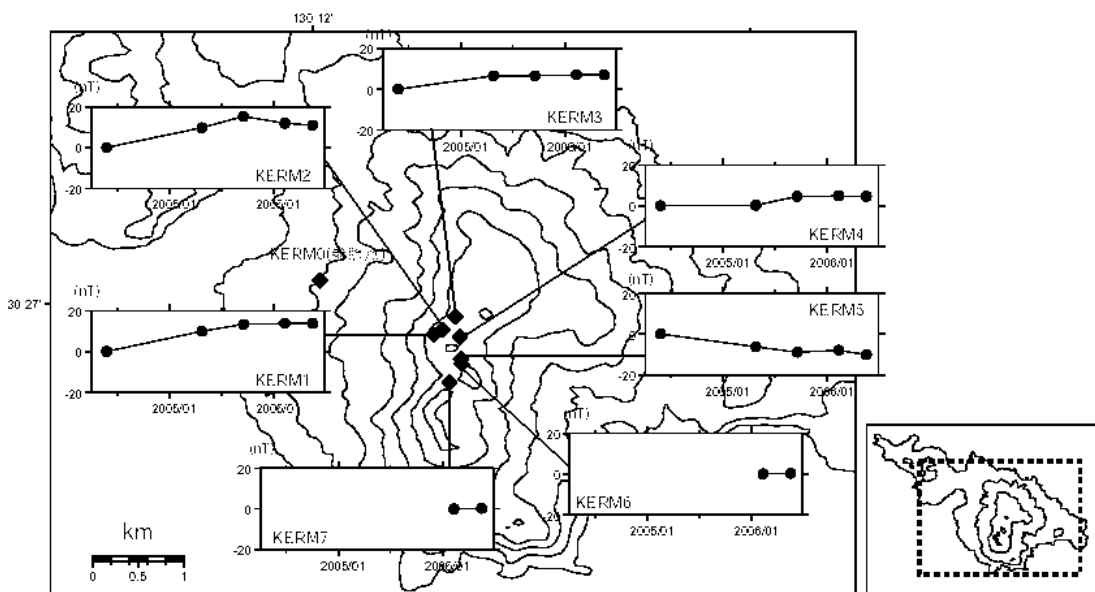


図4 全磁力繰返し観測結果(2004年5月～2006年5月)

2005年9月までは新岳火口北側の観測点で全磁力が増加、南側の観測点で全磁力が減少し、新岳火口周辺の温度上昇に伴う変化が認められましたが、2006年2月以降その傾向は見られなくなりました。

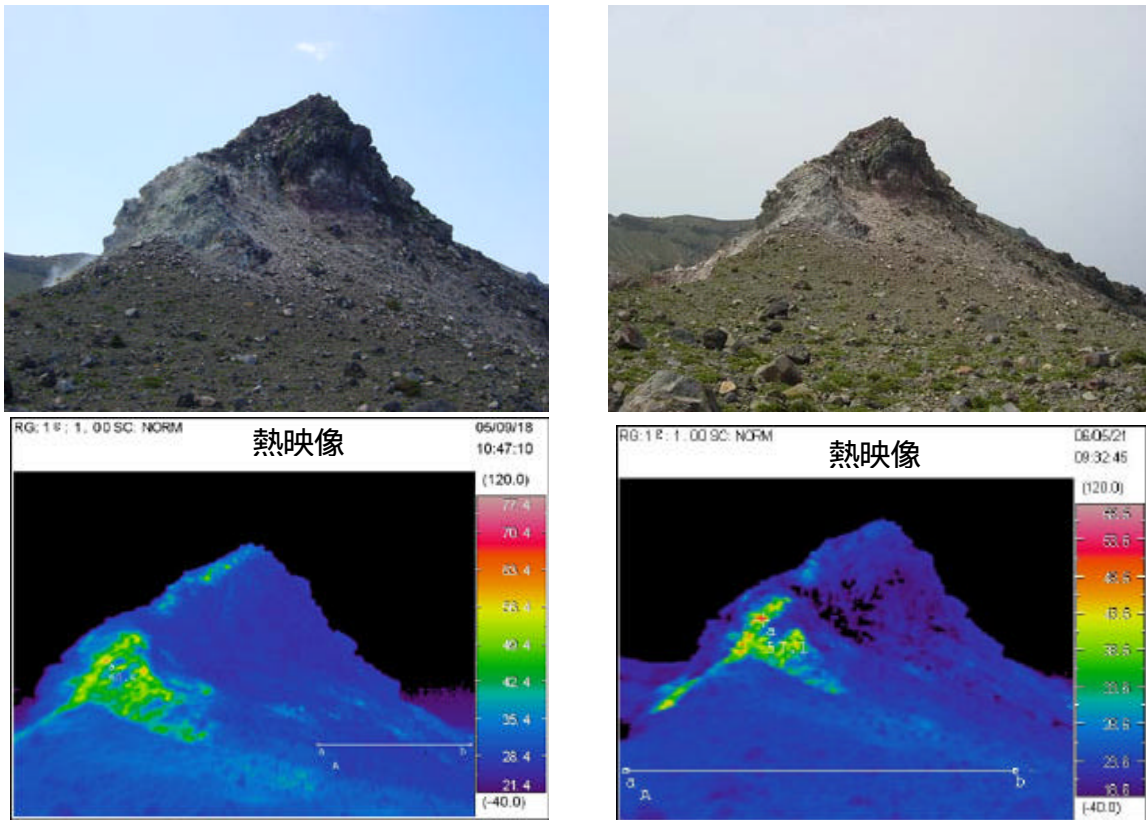


図5 新岳火口西側の地熱地帯 左：2005年9月18日 右：2006年5月21日

噴気の状態に変化はありませんでした。

熱領域の拡大や温度には特に変化はありませんでした。

熱映像は図中の熱異常の見られない部分(図中の白線)で温度平均値を取り、表示レンジを調整しています。

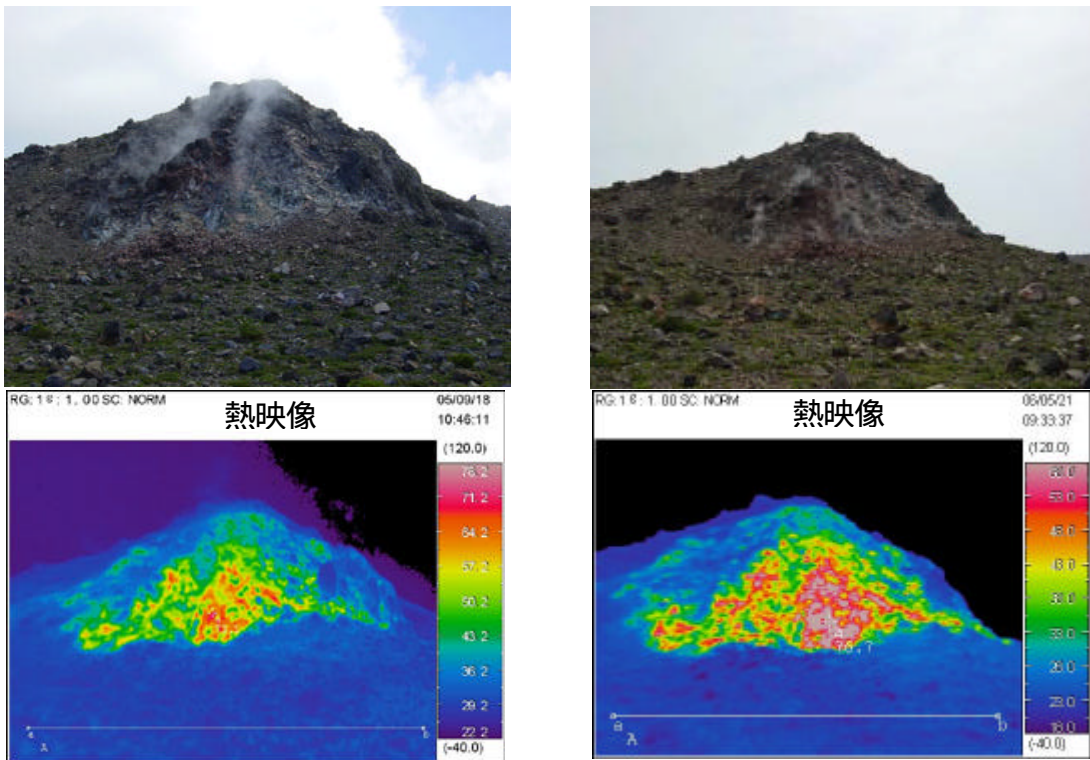


図6 新岳火口西側の地熱地帯 左：2005年9月18日 右：2006年5月21日

噴気の状態に変化はありませんでした。

熱領域の拡大や温度には特に変化はありませんでした。

口永良部島 熱映像は図中の熱異常の見られない部分(図中の白線)で温度平均値を取り、表示レンジを調整しています。

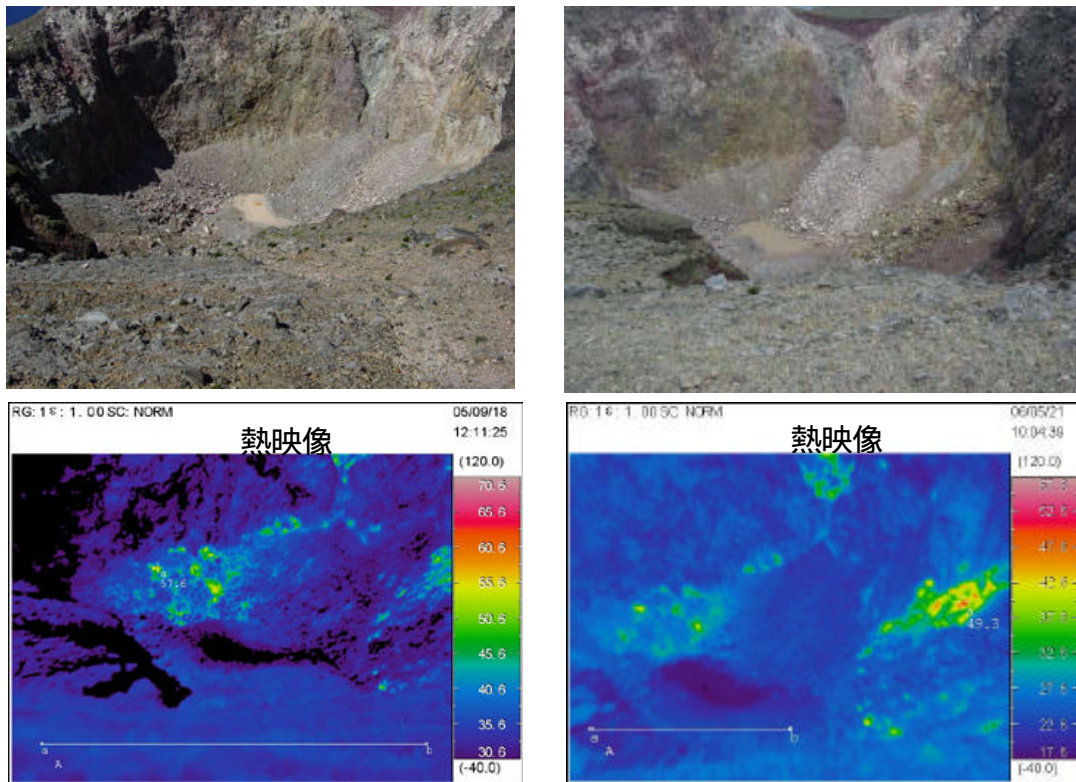


図7 新岳火口 左：2005年9月18日 右：2006年5月21日

噴気の状態に変化はありませんでした。

熱領域の拡大や温度には特に変化はありませんでした。

熱映像は図中の熱異常の見られない部分(図中の白線)で温度平均値を取り、表示レンジを調整しています。

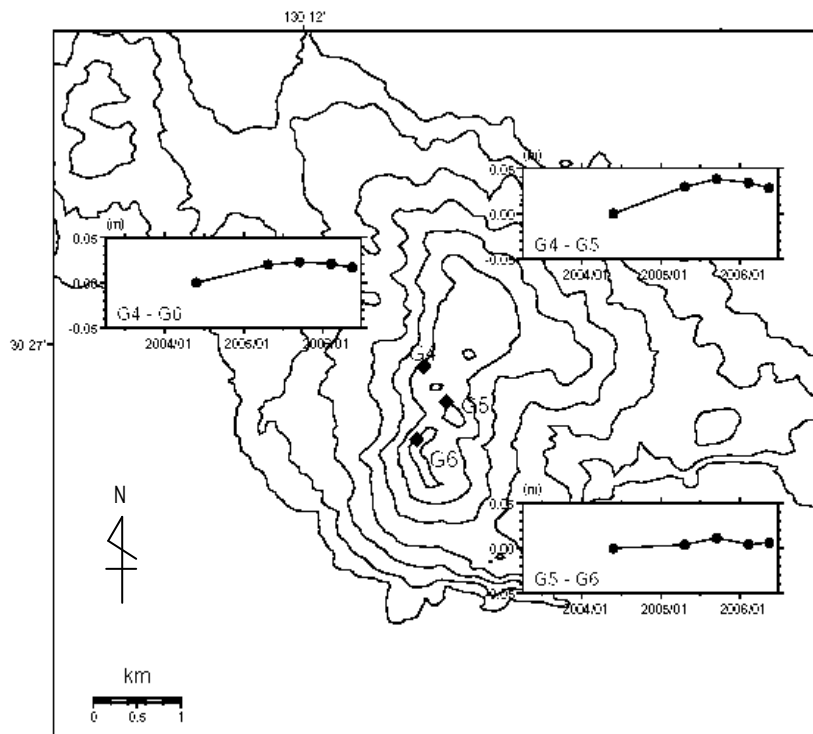


図8 GPS 繰返し観測結果

2005年9月までは、新岳火口を中心に膨張傾向が見られていましたが、2006年2月以降はその傾向は見られなくなりました。